

土木遠景 第八回 福井国家石油備蓄基地

三国港のエッセル堤から次々と打ち上げられる特大の花火が夜空を輝かせた。遠く離れたこの場所には、さすがに花火の音は届かない。

つづら折りになった林道の1個所に、6人の見物客が集まった。私以外は皆、福井在住のようだ。うち4人は会場周辺の混雑を避けて、初めてここに来たという。

2人組の女子大生が、花火の手前に見えるオレンジ色に光り輝く石油タンクを指差して、あれは何かと尋ねた。すると、もう一人いたカメラマンがオイルショック時の石油備蓄基地の役割について説明してくれた。

人家から離れているからか、30基ある巨大な石油タンクも、その存在と役割は、地元でもよく知られていな

いらしい。きっと彼女たちの目には、石油タンクが目新しく、花火と同様にキレイな光景として映ったに違いない。

ほどなく小さな歓声は消え、迎りに新月の闇夜が訪れた。そして、目の前には、人知れず非常事態に備える石油タンクだけが残された。これがいつもの姿のはず。いつまでも、このまま注目を浴びないことを祈るばかりだ。



おおむら・たくや

1982年生まれ。写真家。大学で土木を専攻。卒業後、写真撮影に針路をとる。大学4年間で苦勞して修めた構造力学の知識を生かして、雑誌取材を中心に土木の施工を撮影している。

[撮影地] 福井県福井市 二枚田幹線林道より

© OMURA Takuya

「文・写真」大村拓也